

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第160集

富士見市

上内手遺跡

県道東大久保大井線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1995

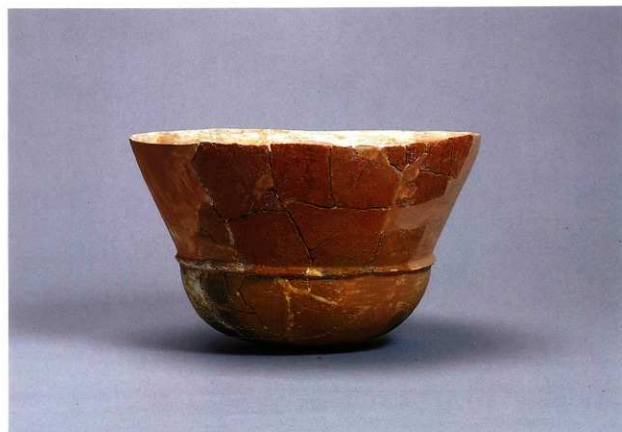
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景



古墳時代初頭(第2号住居跡)



古墳時代初頭(第7号住居跡)



平安時代(第6号住居跡)

序

埼玉県は、首都圏の一部として発展し、現在人口増加率の最も高い県であります。特に県南部はこの傾向が著しく、慢性的な交通渋滞がみられ、都市の計画的な再整備と共に交通網の整備も急務となっております。

本県では、このような社会的な変化に対応するため、国道などの幹線道路だけでなく、地域交通網の整備についても継続的、計画的に進められております。このたび計画された県道東大久保・大井線もこれらの事業の一環として実施されるものです。

今回の建設予定地には伊佐島遺跡と上内手遺跡が知られています。そこで、その取り扱いについて、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、当事業団が発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになりました。このうち、伊佐島遺跡については、発掘調査、報告書の刊行も終了しております。本書は未報告となっていた上内手遺跡の報告書であります。

ところで、富士見市東部の荒川・新河岸川が形成した低地部分には自然堤防が発達し、古代から人々の生活の舞台となり、中世の城館跡である県指定旧跡「難波田氏館跡」が知られているほか、すでに報告いたしました上福岡市伊佐島遺跡や今回報告いたします上内手遺跡は古代から中世に及ぶ代表的な遺跡といえましょう。

上内手遺跡の発掘調査では、古墳時代前期・平安時代・

中世にわたる複合した集落跡であることが判明いたしました。

従来、荒川右岸の低地部では発掘調査例が少なく、今回の調査成果は、この地域の古代・中世の様子を知る貴重な資料になると思われます。

特に、古墳時代はじめの住居跡からは遠く北陸地方の影響を受けた土器も発見され、古墳時代にはこの地域でも広域に及ぶ交流のあったことが判明したことは大きな成果といえましょう。

本書はこれらの成果をまとめたものです。学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の保護及び教育・普及の資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の調整から本書の上梓に至るまで御指導、御協力いただきました埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、富士見市教育委員会、並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

- 1.本書は、埼玉県富士見市東大久保121-2他にある上内手遺跡の発掘報告書である。発掘調査届けに対する文化庁長官からの指示通知は平成5年6月30日付け委保第5の170号である。
- 2.遺跡名の略号は、KMUである。
- 3.発掘調査は、県道東大久保大井線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のあと、埼玉県土木部道路建設課の委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4.発掘調査は、平成5年1月1日から平成5年4月30日まで実施し、平成5年3月までは橋本 勉・伴潮宗一が担当し、平成5年4月は杉崎茂樹・君島勝秀が担当した。整理作業は橋本 勉が担当して、平成6年7月1日から平成6年12月31日までおこなった。発掘調査と整理作業の組織は第I章に示した。
- 5.出土品の実測・観察表および作図は山崎えり子が担当し、橋本 勉が補佐した。
- 6.発掘調査時の写真撮影は杉崎茂樹・橋本 勉・君島勝秀・伴潮宗一が行い、遺物写真撮影を橋本 勉が行った。
- 7.遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社ムサシノ、巻頭カラー写真の一部は小川忠博に委託した。
- 8.本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、その他は橋本 勉が執筆した。
- 9.本書の編集は、資料部資料整理第1課の橋本 勉がおこなった。
- 10.本書に掲載した資料は、平成7年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

凡 例

1. 図中の座標は、国家標準直角座標第九系に基づく座標値を表す。方位は、すべて座標北を示した。

2. 遺構の略号は、以下の通りである。

S J-住居跡、S B-掘立柱建築跡、S K-土坑、S D-溝、S E-井戸

3. 図の縮尺は、下記を基準とした。

遺構全測図、遺構図・遺物出土状況図-1/60、戸・カマドなどの個別図-1/40、土器実測図-1/4、土器断面図-1/3、石器実測図-1/3、古銭-1/2、例外は挿入中に示した。

4. 挿入中におけるスクリーン・トーンの表示は以下のとおりである。



5. 土器実測図における断面黒塗りには須恵器を示す。

6. 観察表の表記は以下によっている。

法量の単位は、cmおよびgである。残存率は百分率で示した。

胎土の含有破砕物・鉱物は次の記号を用いて表記した。

B-黒色粒子、R-赤色粒子、W-白色粒子、S-砂粒、G-金色の光沢粒子。先頭から含有量が多い順である。

「r」が付くと光沢のあるものの表現。

7. 遺物出土状況図の記号は以下のとおりである。

「●」-遺物、「▲」-炭化材

8. 遺構新旧対応

新 ← 旧

SK 1 ← SK 2

SK 2 → SK 3

SK 3 ← SK 4

SK 4 ← SK 5

SK 5 ← SK 6

SK 6 ← SK 8

SK 8 ← SK 9

SK 9 ← SK 10

SD 3 ← SD 4

SD 4 ← SD 5

SD 5 ← SD 8

SD 6 ← SD 7

SD 7 ← SD 9

SD 8 ← SD 10

SD 9 ← SD 11

SD 10 ← SD 12

SD 11 ← SD 13

SD 12 ← SD 14

SD 13 ← SD 15

SD 14 ← SD 16

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I. 発掘調査の概要	1	IV. 遺構と遺物	9
1. 調査に至るまでの経過	1	1. 住居跡	9
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 土壇	29
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3. 掘立柱建築跡	30
II. 遺跡の立地と環境	4	4. 井戸	30
III. 遺跡の概観	6	5. 溝	32
		6. グリッド出土遺物	36
		V. 結語	37

表目次

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表	9	第7表 第8号住居跡出土遺物観察表	22
第2表 第2号住居跡出土遺物観察表	11	第8表 第11号住居跡出土遺物観察表	24
第3表 第3号住居跡出土遺物観察表	12	第9表 第13号住居跡出土遺物観察表	27
第4表 第4号住居跡出土遺物観察表	14	第10表 第2号井戸出土遺物観察表	31
第5表 第6号住居跡出土遺物観察表	17	第11表 溝出土遺物観察表	33
第6表 第7号住居跡出土遺物観察表	21	第12表 グリッド出土遺物観察表	36

挿 図 目 次

第1図	周辺の関係遺跡……………	5	第24図	第8号住居跡……………	22
第2図	上内手遺跡周辺の地形……………	7	第25図	第8号住居跡出土遺物……………	22
第3図	上内手遺跡全体図……………	8	第26図	第9号住居跡……………	23
第4図	第1号住居跡……………	9	第27図	第9号住居跡焼土分布状況……………	23
第5図	第1号住居跡出土遺物……………	9	第28図	第10号住居跡……………	23
第6図	第2号住居跡遺物出土状況……………	10	第29図	第11号住居跡炉出土台石……………	24
第7図	第2号住居跡……………	10	第30図	第11号住居跡遺物出土状況……………	24
第8図	第2号住居跡出土遺物……………	10	第31図	第11号住居跡出土遺物……………	24
第9図	第3号住居跡遺物出土状況……………	12	第32図	第11号住居跡……………	25
第10図	第3号住居跡出土遺物……………	12	第33図	第12号住居跡遺物出土状況……………	26
第11図	第3号住居跡……………	13	第34図	第12号住居跡……………	26
第12図	第4号住居跡遺物出土状況……………	14	第35図	第13号住居跡……………	27
第13図	第4号住居跡……………	14	第36図	第13号住居跡出土遺物……………	27
第14図	第4号住居跡出土遺物……………	14	第37図	第14号住居跡……………	28
第15図	第5号住居跡……………	15	第38図	土壌(SK1～SK9)……………	29
第16図	第6号住居跡遺物出土状況……………	15	第39図	第1号掘立柱建築跡……………	30
第17図	第6号住居跡出土遺物……………	16	第40図	井戸(SE1～SE3)……………	31
第18図	第6号住居跡……………	18	第41図	第2号井戸出土遺物……………	31
第19図	第6号住居跡カマド……………	19	第42図	溝(SD1～SD14)……………	32
第20図	第6号住居跡掘り方……………	19	第43図	溝出土遺物……………	33
第21図	第7号住居跡遺物出土状況……………	20	第44図	グリッド出土遺物……………	36
第22図	第7号住居跡出土遺物……………	20	第45図	上内手遺跡古墳時代前期土器群の復元……………	37
第23図	第7号住居跡……………	21			

図 版 目 次

- 図版 1 上内手遺跡遠景、上内手遺跡A区全景(北から)
- 図版 2 上内手遺跡B区全景(北から)、上内手遺跡B区近景 第3図
- 図版 3 上内手遺跡A区近景 第3図、第1号住居跡 第4図
- 図版 4 第2号住居跡遺物出土状況、第5図 第2号住居跡 第7図
- 図版 5 第3号住居跡遺物出土状況 第9図、第3号住居跡 第11図
- 図版 6 第4号住居跡 第13図、第5号住居跡 第15図
- 図版 7 第6号住居跡遺物出土状況、第16図 第6号住居跡 第18図
- 図版 8 第7号住居跡 第23図、第8号住居跡 第24図
- 図版 9 第9号住居跡 第26図、第9・10号住居跡 第26図・第27図
- 図版10 第11号住居跡遺物出土状況 第30図、第12号住居跡遺物出土状況 第33図
- 図版11 第11・12号住居跡 第32図・第33図、第13号住居跡 第35図
- 図版12 第7号土塼 第38図、第9号土塼 第38図
- 図版13 第1・3号井戸 第40図、第2号井戸 第40図
- 図版14 第1号溝 第42図、第6号溝 第42図
- 図版15 第11号溝 第42図、第13号溝 第42図
- 図版16 第2号住居跡 第8図1、第2号住居跡 第8図2 第3号住居跡 第10図5、第3号住居跡 第10図1 第3号住居跡 第10図6、第3号住居跡 第10図2
- 図版17 第7号住居跡 第22図2、第7号住居跡 第22図4 第7号住居跡 第22図5、グリッド 第44図5
- 図版18 第6号住居跡 第17図6、第6号住居跡 第17図9、第6号住居跡 第17図12、第6号住居跡 第17図14、第6号住居跡 第17図16、第6号住居跡 第17図18
- 図版19 第6号住居跡 第17図20、第6号住居跡 第17図22、第6号住居跡 第17図25、第6号住居跡 第17図34、第1号溝 第43図1

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため、各種の道路建設工事が進められている。県道東大久保大井線の建設工事でも埼玉県西部の交通量の増大と地域交通網の整備を図る目的をもって、埼玉県土木部によって計画された。こうした開発事業に対応するために、県教育局生涯学習部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行い、文化財保護と開発事業との円滑な調整を進めているところである。

平成4年4月28日付け道建第35号で道路建設課長から文化財課長あて「県道東大久保大井線改良事業地内の埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づき、平成4年7月6日付け教文第103-5号により次のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
上内手遺跡(No24-054)	集 落 跡	古墳～平安・中世	富士見市東大久保121-2 他

2. 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査を実施する場合は、当課と協議すること。

道路建設課と文化財保護課は、この確認調査の結果に基づき上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、道路網の整備を目的とした建設計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなった。

発掘調査の実施については、道路建設課、文化財保護課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により、調査方法・調査期間・調査経費について協議を行った。その結果、平成5年1月から平成5年4月まで発掘調査を実施することが決定された。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が、財団法人埼玉県文化財調査事業団から同法第57条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査届が提出され、平成5年1月から発掘調査が実施された。

調査届に対する文化庁からの指示通知番号は、平成5年6月30日付け委保第5の170号である。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成4年1月1日から平成5年4月30まで実施した。発掘対象面積は、1,100m²であった。グリッドは10mを基準として設定した。北から南にAからCまで、西から東に1から13までであった。

1月中旬—ユニットハウス設置、機材運搬などの発掘準備を行った。

1月下旬—重機による表土除去作業を行った。A区は、竹の切り株が林立している部分では、遺構を破壊するおそれがあったため、確認面の少し上で止めた。攪乱がかなり入っていて、遺構確認が難しかった。中世以降の溝がかなり入っていたが、古墳時代前期の住居跡、平安時代の住居跡を確認した。

引き続き、B区の表土除去作業を行った。畑地であったため順調に進んだ。攪乱による削平がかなり深く入っていて、住居跡の覆土が薄いものも見受けられた。中世以降の溝、古墳時代前期の住居跡、平安時代の住居跡などが検出された。

2月—A区から順次遺構を掘り進めた。土色識別の困難さと竹林の日陰で、作業の進み具合は鈍かった。古墳時代前期の住居跡が5軒、平安時代の住居跡が1軒、溝が5条などであった。

3月—A区の作図、写真撮影などを行った。A区が終了した時点で航空写真を撮影した。順次B区に進んだ。B区は住居跡の見つかった部分から、調査を始めた。この部分は、B-9、B-10、C-9、C-10のグリッド部分より

わずかに高くなっていた。特にSD11は、掘り込みが深く、完掘に日数を要した。平成4年度終了。

4月—平成5年度開始。若干の研修期間を置いて、発掘調査を再会する。天候に恵まれ、作業は順調に進行した。古墳時代前期の住居跡6軒、平安時代の住居跡2軒、中世以降の溝、井戸、土坑を調査した。遺構が掘り上がった順に、作図・写真撮影を行った。

図面、写真の最後の詰めを行い、航空写真を撮影した。最後に、機材などの撤収を行い、駆け足の発掘調査は終了した。

整理・報告書の刊行

平成6年7月1日から平成6年12月31日までの6か月間実施した。

7月・8月に出土遺物の水洗い・注記・復元作業を行った。同時に、図面の整理・第二原図を作成した。

9月・10月—遺構図面のトレース、土器の実測・トレース、破片の拓本・断面実測・トレースを行った。遺構図の版組を行った。

11月—遺物写真撮影・遺物版組を行った。版組を終了し、割り付け・編集作業を行った。

12月—原稿執筆をして、印刷以外の報告書刊行のすべてを終了した。

1月から3月—印刷所に入れ、校正を重ねて報告書を刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査(平成4・5年度)

理事長 荒井修二(平成4年度)
荒井桂(平成5年度)
副理事長 早川智明(平成4年度)
富田真也(平成5年度)
専務理事 横川好富(平成5年度)
常務理事兼管理部長 倉持悦夫(平成4年度)
柴崎光生(平成5年度)
理事兼調査部長 栗原文藏(平成4年度)
中島利治(平成5年度)

管理部

庶務課長 萩原和夫
主査 賛田清
主事 菊池久
経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 福田昭美
主事 腰塚雄二

調査部

調査部副部長 梅沢太久夫(平成4年度)
高橋一夫(平成5年度)
調査第4課長 石岡憲雄(平成4年度)
今井宏(平成5年度)
主任調査員 橋本勉(平成4年度)
調査員 伴瀬宗一(平成4年度)
主任調査員 杉崎茂樹(平成5年度)
調査員 君島勝秀(平成5年度)

(2)整理作業(平成6年度)

理事長 荒井桂
副理事長 富田信也
専務理事 栃原嗣雄
常務理事兼管理部長 加藤敏昭
理事兼調査部長 小川良祐
管理部
庶務課長 及川孝之
主査 市川有三
主事 長滝美智子
主事 菊池久
専門調査員
兼経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 福田昭美
主事 腰塚雄二

資料部

資料部長 塩野博
資料副部長 谷井彪
兼資料整理第一課長
主任調査員 橋本勉
調査員補 山崎えり子

II 遺跡の立地と環境

上内手遺跡は、東武東上線「上福岡駅」から東方へ約3km程離れた富士見市東大久保に所在する。遺跡は、古墳時代、平安時代、中世以降と各時代にわたる集落遺跡である。遺跡付近を流れる新河岸川は、入間台地から流れだし、荒川に沿って南下して、墨田川に注いでいる。上内手遺跡はこの川の左岸にある。

遺跡のある地域は、大宮台地と武蔵野台地との間にある。荒川に流れ込む中小の河川群が作り出す沖積地である荒川低地に所在している。この低地には、荒川の右岸・左岸を問わずに数多くの自然堤防が存在している。特にこの遺跡がある場所は、荒川と新河岸川が接近するところで、特に自然堤防が発達するところでもある。当遺跡がある富士見市東大久保・下南畑地区はその代表的な場所である。

遺跡がある自然堤防のあちこちでは、第二次世界大戦中に耕地整理や土砂の運搬が行われたらしく、現在は水田化され、遺構のかなり上面まで削平されてしまった。今回の発掘調査地区でも、A区とB区の間遺跡の中央部分、A区の北側部分で土砂を採った大規模な攪乱の跡があった。

遺跡周辺の自然堤防上には、城山遺跡・上福岡No34遺跡・伊佐島遺跡・山形遺跡・難波田氏館跡などがある。伊佐島遺跡では、弥生時代の住居跡が見つかった。上内手遺跡の調査時期の前後にも自然堤防上の数カ所で、富士見市による調査が行われ、弥生式期以降の住居跡が見つかり出てきた。今回報告する上内手遺跡例を加え、今後ますます集落跡が増加するであろう。

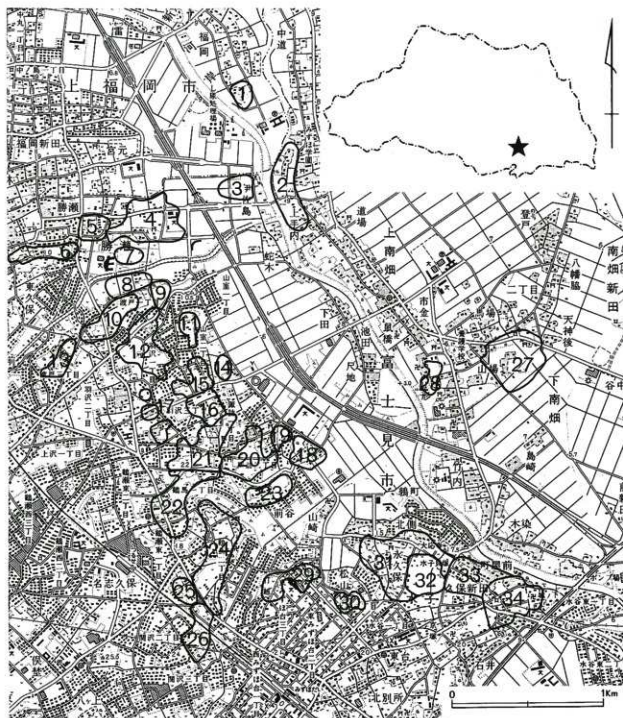
難波田氏館跡は、十数回の発掘調査が行われ、中世城館としての輪郭が明らかになりつつある。伊佐島遺跡・上内手遺跡でも、難波田氏館跡と関連すると思われる、溝や井戸が見つかった。現時点では、関連が不明であるが、自然堤防上の発掘が進むに従って、おいおい解明されるであろう。

低地部分の遺跡と比較して、西側にある武蔵野台地部分は、先土器時代から果々と人々の生活が営まれた場所である。遺跡の分布もかなり密で、各時代の代表的な遺跡がある。縄紋時代早期末から前期にかけての代表的遺跡である打越遺跡、縄紋時代前期の大集落である水子貝塚遺跡などの縄紋時代の遺跡が林立する。

上内手遺跡の中心的な時代である古墳時代前期は、台地の上にも大集落を作っていた。南通遺跡では、200軒を越す住居跡が発掘された。上福岡市権現山遺跡・北通遺跡などでは、当時の墳墓の一種である方形周溝墓も見つかっている。特に、北通遺跡8号方形周溝墓例は、大形であることや、主体部の副装品などからかなりの身分の人が葬られたものと思われる。

台地上の遺跡と自然堤防上の遺跡とは、当時の主要な生産構造である水田(稲作)をめぐって、連鎖しあっている。今後、増加するであろう自然堤防上の遺跡は、多くの回答を与えてくれるものと思われる。

第1図 周辺の関係遺跡



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 城山城跡 | 8. 薬師前遺跡 | 15. 山室遺跡 | 22. 谷津遺跡 | 29. 打越遺跡 |
| 2. 上内手遺跡 | 9. 貝塚山遺跡 | 16. 平塚遺跡 | 23. 殿山遺跡 | 30. 松山遺跡 |
| 3. 伊佐島遺跡 | 10. 東渡戸遺跡 | 17. 羽沢前遺跡 | 24. 御庵遺跡 | 31. 氷川前遺跡 |
| 4. 宮廻遺跡 | 11. 大谷遺跡 | 18. 宿遺跡 | 25. 新田遺跡 | 32. 水子貝塚遺跡 |
| 5. 鍛冶海戸遺跡 | 12. 羽沢遺跡 | 19. 殿山遺跡 | 26. ハケ上遺跡 | 33. 東前遺跡 |
| 6. 稻荷前遺跡 | 13. 海渡遺跡 | 20. 黒貝戸遺跡 | 27. 難波田氏館跡 | 34. 観音前遺跡 |
| 7. 谷田遺跡 | 14. 山室谷遺跡 | 21. 宮脇遺跡 | 28. 山形遺跡 | |

III 遺跡の概要

上内手遺跡は、荒川低地に点々と存在している自然堤防の上に立地している。新河岸川に沿って南北に延びる自然堤防であって、現在も居住域として機能している。今回の発掘調査は、道路部分だけで遺跡を東西に縦断することになった。古墳時代前期と平安時代に集落が営まれ、中世に居館が形成された遺跡であった。

遺跡の標高は、約7mで、居住域と水田からなっている。A区は、新河岸川に向かって緩やかに傾斜していた。遺構は、現地表から0.50m～0.80m下から見つけ出された。戦時中に土砂が大量に採取されたことと、水田化のための耕地整理とその後の耕作によって、多くの遺構は削平されたり、崩壊したりした。

今回の調査では、道路部分と掘乱で崩壊した中間部分を挟んで便宜的にA区とB区に分けた。見つかった遺構は、竪穴住居跡14軒、土壇9基、掘立柱建物跡1棟、井戸跡3基、溝跡24条と不規則なビット群であった。遺構の数に比べて、遺物の出方はとても少なかった。古墳時代前期の土器、平安時代の土器、中世の陶器・板石塔婆・砥石、中世以降の陶磁器類であった。

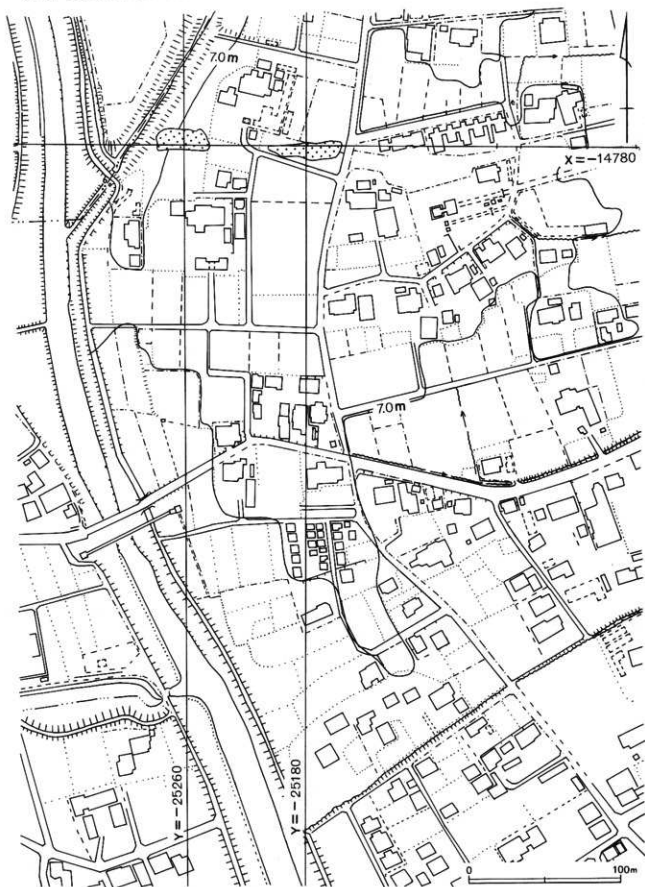
古墳時代前期の遺構は、竪穴住居跡が11軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条であった。竪穴住居跡は、A区5軒、B区5軒ではほぼ全面に広がっていたと思われる。掘乱で崩壊した部分や未調査部分を含めるとかなりの大きさの集落跡であつたらしい。S J 2・S J 3・S J 11・S J 12は、この時期に良く見られる火災住居跡であった。梁や垂木が炭化材となって残っていた。また、新河岸川に向かって傾斜する溝は、環濠の可能性もある。

この期の遺物で注目されるのは、S J 7出土の一括資料である。括れ部に三角形の貼り付け突帯をもつ大形埴は、当地域ではなかなか見られないものである。古墳時代前期の土器を考える上で貴重な資料である。

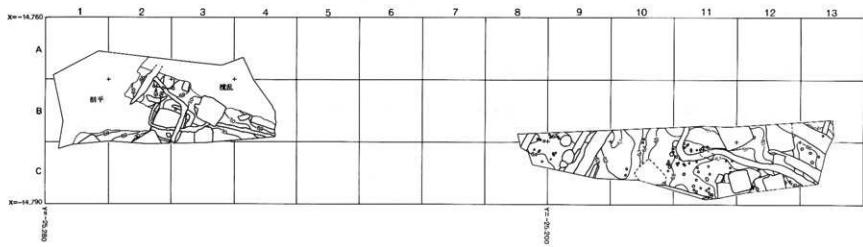
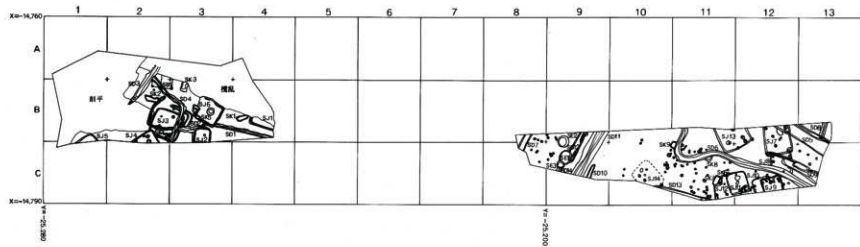
平安時代の遺構は、竪穴住居跡3軒であった。B区の2軒は、削平が激しかった。それに比較して、A区の第6号住居跡は掘り込みが深く、遺物の出土も多く見られた。九世紀代の土師器甕・須恵器蓋・須恵器坏が出土した。

中世以降の遺構には、溝跡と井戸跡と土壇と不規則な柱穴群があった。溝は、SD 5・SD 8・SD 9・SD 13とSD 7・SD 10～SD 14が直交するするような配置になっていた。井戸は、溝跡と絡むような配置であった。伊佐島遺跡などと共に、難波田氏館跡との関係が考えられる。

第2図 上内手遺跡周辺の地形



第3圖 上内手遺跡全体図



IV. 遺構と遺物

1. 住居跡

第4図 第1号住居跡



第5図 第1号住居跡出土遺物



第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	14.0	2.4		R+W'+W	普通	淡褐色	10%	

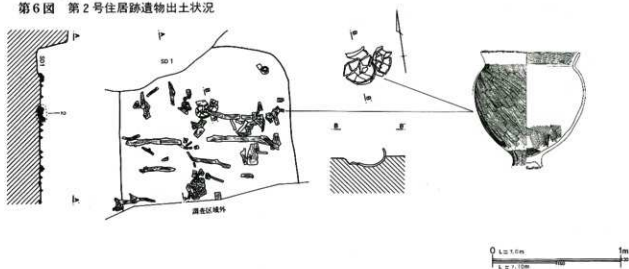
第1号住居跡(S J-1)第4図、第5図

B-4グリッドで見つかった。北側の大部分は、攪乱で削られていた。方形をしていたものと思われる。長径×短径×深さは(4.05)×(1.15)×(0.25)mであった。壁

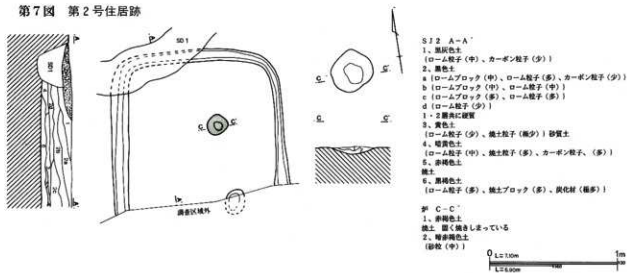
溝は幅約0.12mの溝が、残っている部分で全周していた。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。自然堆積。床面はフラットで堅かった。

主な出土遺物は、甕。

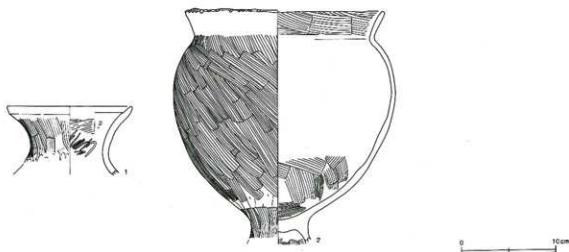
第6図 第2号住居跡遺物出土状況



第7図 第2号住居跡



第8図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡(SJ-2)第6図~第8図

B-3・C-3グリッドで見つかった。SD1に切られていた。南側は調査区外であった。方形をしていた。長径×短径×深さは(2.45)×2.75×0.5mであった。主軸方向はN-5°-Eであった。地床炉1基が見つかった。壁溝は幅約0.28m、深さ約0.20mの溝が全周していた。ピットは1本。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

1層・2層が自然堆積。3層以下が人為堆積であった。3層以下は、火災時の一括堆積。火災住居跡。西側の壁外にも焼土が分布していた。床面または、浮いた状態で炭化材が出土した。床面はフラットで堅かった。

主な出土遺物は、壺・台付甕。

第3号住居跡(SJ-3)第9図~第11図

B-2・B-3グリッドで見つかった。SK4、SD1、SD4に切られていた。方形をしていた。長径×短径×深さは4.75×4.65×0.3mであった。主軸方向はN-68°-Wであった。地床炉1基が見つかった。壁溝は幅約0.12mの溝が西辺・南辺にあった。ピットは7本。そのうち主柱穴と思われるのがP1・P2・P3・P4の4本であった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

自然堆積。覆土は、攪乱があった。炭化材・焼土が床面に密着した状態で見つかった。床面は、フラットであったが、部分的に中央がやや高くなって、堅くしまっていた。土器は床面に密着して、炭化材とともに出土した。

主な出土遺物は、折り返し口縁壺・単口縁壺・高坏・器台などが出土した。

第4号住居跡(SJ-4)第12図~第14図

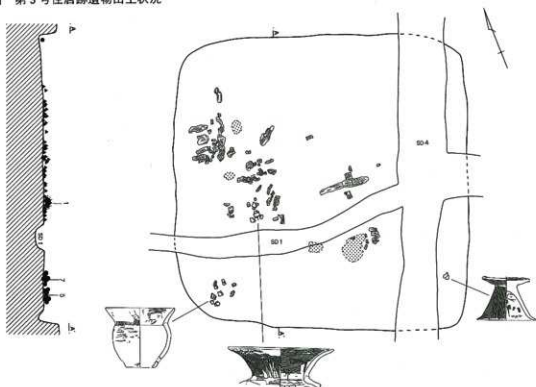
B-2・C-2グリッドで見つかった。南側の大部分は調査区外であった。SJ3を切っていた。方形をしていた。長径×短径×深さは(2.3)×(1.5)×0.25mであった。主軸方向はN-61°-Eであった。ピットは4本。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。南側半分以上は調査区外であった。自然堆積。床面は、フラットで軟弱だった。土器は、床面から出土していた。

主な出土遺物は、単口縁甕。

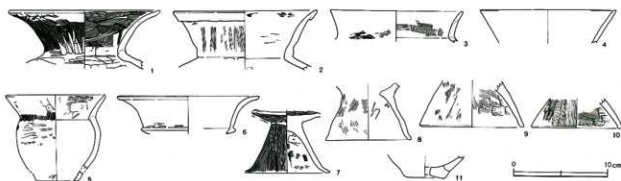
第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.9	7.2		B+W+B+W+R+G	普通	橙褐色	100%	
2	台付甕	21.0	22.3		W+S+R	普通	淡褐色	95%	面外にスス付着

第9図 第3号住居跡遺物出土状況



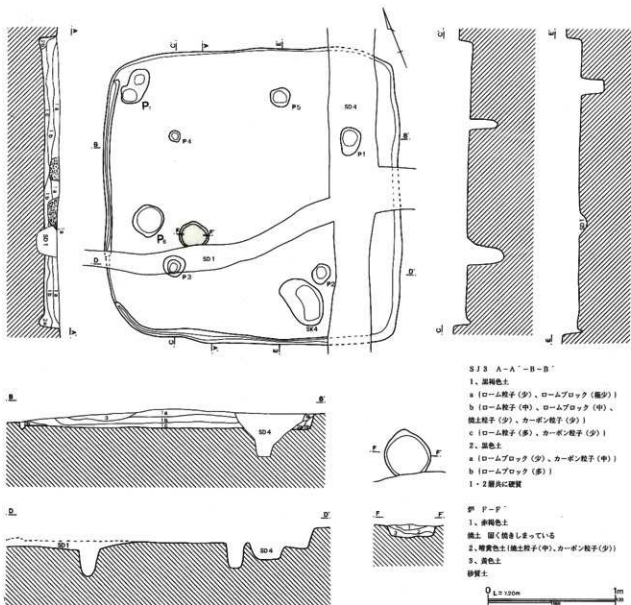
第10図 第3号住居跡出土遺物



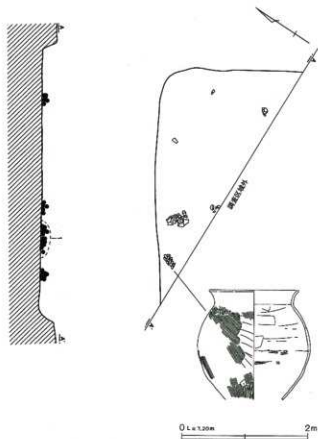
第3表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(16.2)	(6.2)		W+W'+B+B'	普通	橙褐色	70%	摩滅進行して調整痕不明瞭 施く剥離が著しい。二次比熱?
2	壺	(15.0)	6.2		R+B+S	普通	淡橙褐色	40%	
3	甕	(14.0)	3.3		W+W'+R	普通	淡褐色	20%	
4	甕	(14.2)	3.6		W+W'+B+S	普通	橙褐色	25%	
5	埴	10.4	9.0		W+R+W'	普通	茶褐色	50%	
6	高坏	(15.0)	(4.0)		W+W'+R+B	普通	暗褐色	10%	
7	高坏		6.6	(9.0)	W+W'+R+B	普通	赤褐色	100%	
8	台付甕		5.6	(9.0)	W+B	普通	暗褐色	20%	
9	台付甕		4.8	(11.0)	W'+R+W+B'	普通	淡橙褐色	25%	
10	台付甕		(3.1)	(9.6)	W+W'+B+B'+G	普通	黒褐色	10%	
11	甕		2.3	(4.1)	W+B	普通	橙褐色	70%	

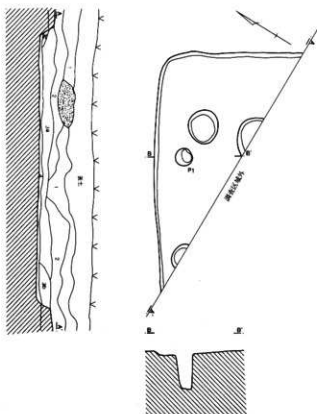
第11図 第3号住居跡



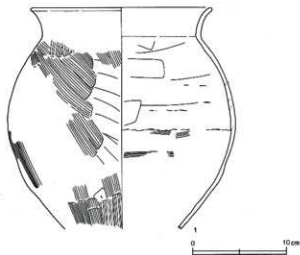
第12図 第4号住居跡遺物出土状況



第13図 第4号住居跡



第14図 第4号住居跡出土遺物



SJ4 A-A'

1、黄褐色土

2、黄褐色土

{ローム粒子(極少)、焼土粒子(極少)、カーボン粒子(極々少)}

3、黄褐色土

a {ローム粒子(少)、焼土粒子(中)、カーボン粒子(中)}

b {ロームブロック(中)、焼土粒子(少)、カーボン粒子(少)}

c {細か〜粒子(中)、焼土粒子(少)、カーボン粒子(少)}

4、暗黄褐色土

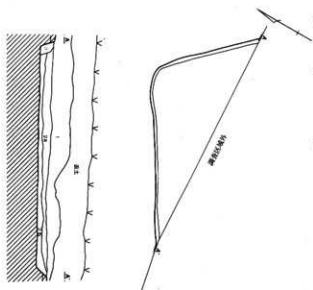
{ローム粒子(中)、ロームブロック(中)、焼土粒子(中)、カーボン粒子(少)}

0 L=1.20m 2m

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	19.0	23.3		S+R+W+W'+B'	普通	赤褐色	40%	二次被熱 脆弱で器面荒れる

第15図 第5号住居跡



第5号住居跡(SJ-5)第15図

B-1・C-1グリッドで見つかった。大部分は調査区外であった。方形をしていた。長径×短径×深さは(1.4)×(1.3)×0.2mであった。主軸方向はN-60°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であったものと思われた。自然堆積。床面は、フラットであるが軟弱であった。

遺物は、ほとんど出土していなかった。

SJ5 A-A'

1. 紫色土

2. 灰色土

a (ローム地子(少))

b (ローム地子(小)、ロームブロック(少))

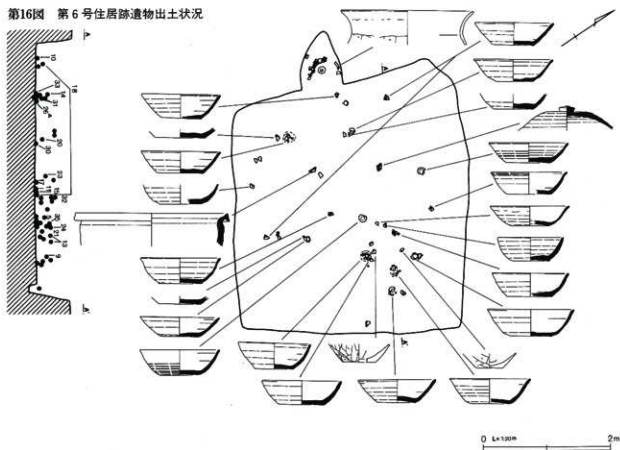
3. 暗褐色土

(ロームブロック(中)) 2、3層共に硬質

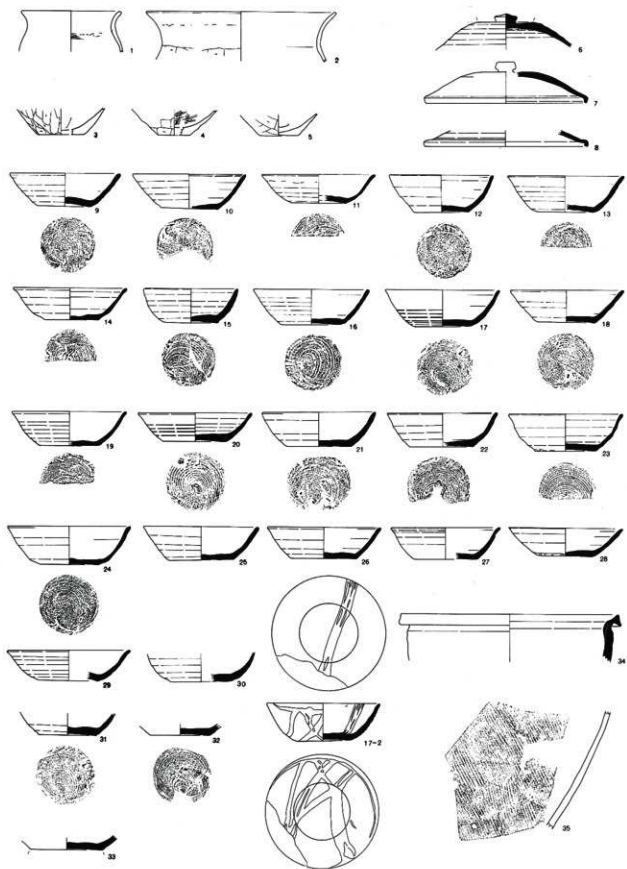
4. 暗褐色土

0 1m 2m

第16図 第6号住居跡遺物出土状況



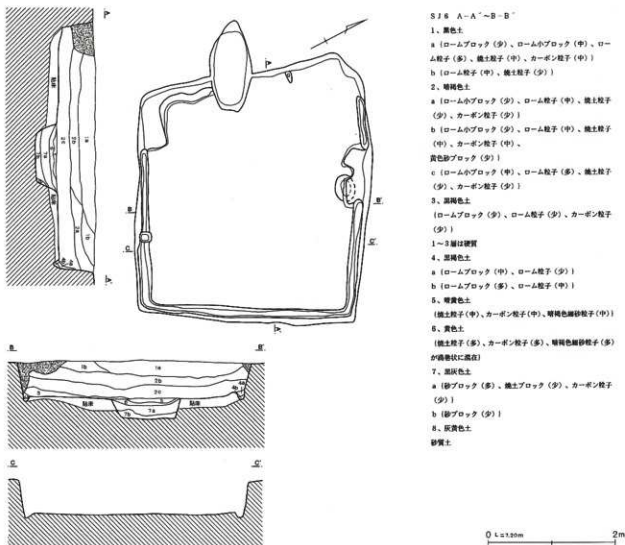
第17图 第6号住居跡出土遺物



第5表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(10.2)	4.3		W+W+B+R+S+小石(微)	普通	濃橙褐色	15%	
2	甕	(19.8)	5.2		W'+W+B'+B+S+R(微)	普通	濃橙褐色	20%	
3	甕		2.7	(4.8)	W'+W+S+R+B'	普通	淡橙褐色	20%	
4	手捏		2.7	(3.2)	W'+W+R	普通	暗褐色	30%	
5	甕		2.3	(3.9)	W'+G'+W+B+R+S	普通	淡橙褐色	40%	
6	蓋		3.7		W+B+W'+小石	普通	淡灰色	50%	
7	蓋	(16.8)	3.3		W+B+W'	普通	濃灰褐色	30%	
8	蓋	(17.0)	2.7		W+小石+W'	普通	濃灰色	20%	
9	坏	11.6	3.6	5.3	B+W+B'+S	普通	灰褐色	80%	
10	坏	12.0	3.7	5.9	W+B+B'(少)+R(少)	普通	濃灰褐色	30%	口唇外部に自然釉
11	坏	(12.0)	3.0	(5.8)	W+S	普通	暗灰褐色	30%	
12	坏	11.0	4.0	5.7	W+B+W'+S+H	普通	灰褐色	60%	
13	坏	(12.3)	3.8	5.8	W+R	普通	暗赤灰褐色	20%	
14	坏	(12.0)	3.3	5.5	S+B+W+W'	普通	灰褐色	40%	
15	坏	(10.0)	3.6	5.8	S+W+W'(少)	普通	暗赤褐色	30%	
16	坏	12.2	3.8	6.3	S+小石	普通	灰褐色	75%	
17	坏	12.0	3.1	5.8	W+S	普通	灰褐色	85%	
18	坏	12.0	3.5	6.1	W+S	普通	濃灰	90%	
19	坏	(12.0)	3.6	(6.2)	W+H+W'	普通	暗赤褐色	40%	内部に火ダスキ度 口縁外部に黒褐色の自然釉
20	坏	12.0	3.1	6.6	W+B+S+小石(少)	普通	灰褐色	70%	
21	坏	(12.0)	3.1	6.8	W+W'+S+B'	普通	暗灰褐色	30%	
22	坏	11.6	3.6	6.7	B+W+R+小石(少)	普通	淡灰褐色	50%	
23	坏	(12.0)	4.0	6.3	W+S+小石	普通	灰褐色	30%	
24	坏	(13.0)	4.5	6.0	W+B+W'+S+小石	普通	橙褐色	50%	
25	坏	12.1	3.7	6.7	W+S+小石(少)	普通	濃灰褐色	40%	
26	坏	12.0	3.3	6.8	W+R+S	普通	灰褐色	20%	
27	坏	11.6	3.3	6.7	W+R+W'+S	普通	明淡褐色	30%	
28	坏	(12.0)	3.0	5.6	W+W'+S+B	普通	灰赤褐色	20%	
29	坏	(13.0)	3.2	(6.3)	W+H+S	普通	灰褐色	40%	
30	坏		3.0	(6.4)	W'+H+R+小石	普通	暗橙褐色	100%	
31	坏		2.8	6.1	S+W+W'	普通	濃赤灰褐色	90%	
32	坏		1.2	6.2	R+B+W'+小石	不良	淡橙褐色	70%	
33	坏		1.6	7.4	W+B+W'+H	普通	灰色	70%	
34	甕	(22.8)	5.0		小石+H+W+W'	普通	暗褐色	10%	
35	甕				W+W'+H+小石(微)	普通	灰色		

第18図 第6号住居跡



第6号住居跡 (SJ-6) 第16図~第20図

B-3グリッドで見つかった。SD1、SK5に切られていた。方形をしていた。長径×短径×深さは4.8×3.75×0.75mであった。主軸方向はN-63°-Wであった。

カマド1基が見つかった。壁溝は幅約0.26mの溝が、カマド以外の辺に認められた。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より平安時代・九世紀中葉であった。貼床までの1~2層は、自然堆積であったが、極めて堅かった。

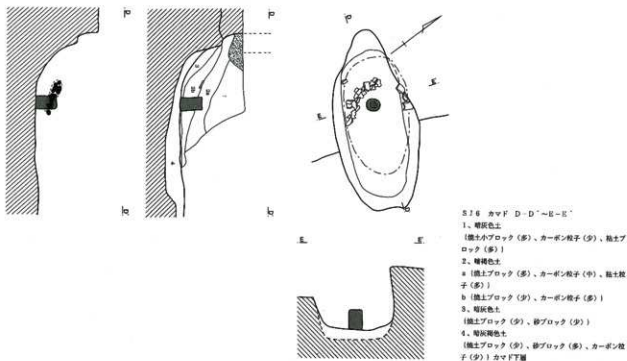
カマド右側は、掘りすぎであった。カマドは北西辺にあり、天井は崩壊していたものの、良好な状態で、支脚

がカマド中央に直立していた。底面の状態から2回作り変えられていた。

北辺側に砂質土と焼土が混在したブロックがあった。直下の壁周溝は途切れていた。床面は、フラットで堅かった。カマド左側には、床面からテラス状に一段高くなった部分があって、堅く突き固められていた。中央部貼床直下に直径約1.1mの円形ピットがあり、埋土に砂ブロックを含んでいた。

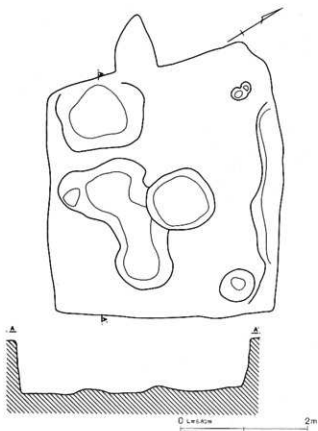
遺物は、床面及び浮いた状態で出土した。須恵器蓋3個、須恵器杯・26個、須恵器甕1個体、土師器5個体が実測できた。

第19図 第6号住居跡カマド



0 L=10m 1m

第20図 第6号住居跡掘り方



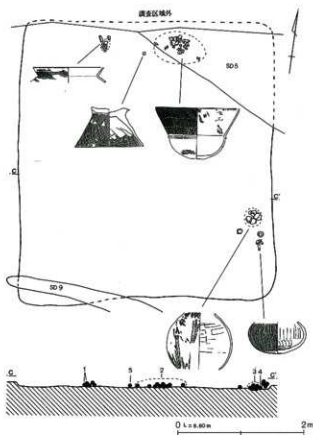
第7号住居跡(SJ-7)第21図～第23図

B-12・C-12グリッドで見つかった。SD 5、SD 6、SJ 8に切られていた。方形をしていた。長径×短径×深さは(4.35)×4.1×0.1mであった。主軸方向はN-8°-Wであった。地床炉2基が検出された。貯蔵穴は1.40×0.70mの楕円形で浅いものであった。

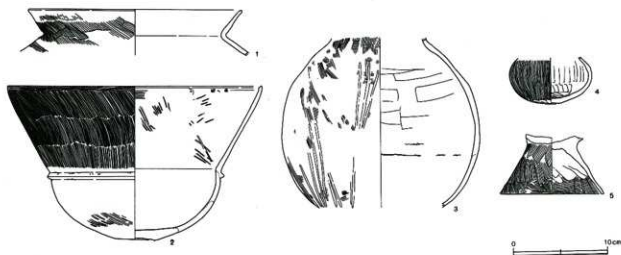
ピットは4本。そのうち主柱穴と思われるのがP 1・P 2・P 3の3本であった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であったと思われる。床面は部分的に堅かった。炉は浅かった。

遺物は、床面に密着して出土した。おもな遺物は、甕、壺、大形埴、台付き甕であった。貼り付け突帯の大形埴は、北陸系と思われる。

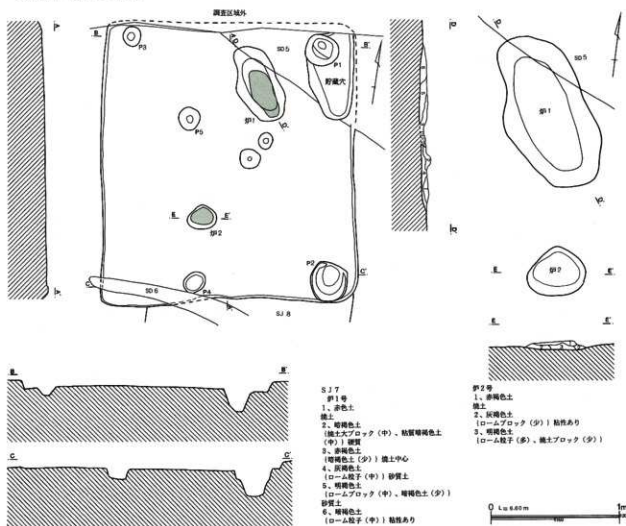
第21図 第7号住居跡遺物出土状況



第22図 第7号住居跡出土遺物



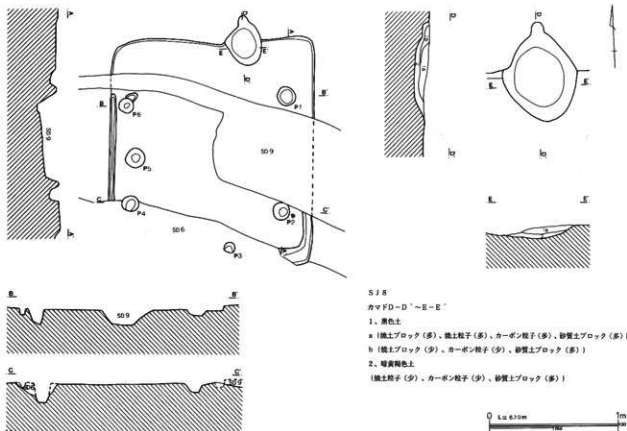
第23図 第7号住居跡



第6表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(22.4)	4.8		W'+R+W+B'	普通	灰赤褐色	40%	
2	大形埴	(26.8)	16.2	4.3	W'+W+小石	普通	橙褐色	40%	表面摩滅 脆い
3	甕	(17.7)			小石+W+B+R	普通	暗褐色	30%	最大径 20.8cm 脆い
4	埴		4.5	2.5	R+小石	普通	橙褐色	100%	
5	台付甕		6.1	10.9	W+S+W'+R'	普通	明褐色	100%	

第24図 第8号住居跡



第25図 第8号住居跡出土遺物



第7表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(14.4)	1.3		W+W+S	普通	灰色	10%	

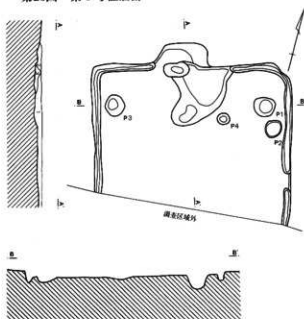
第8号住居跡(S J-8)第24図、第25図

C-12グリッドで見つかった。方形をしていた。SD 6・SD 9に切られていた。S J 7を切っていた。長径×短径×深さは3.6×3.25×0.05mであった。主軸方向はN-0°。カマド1基が見つかった。壁溝は幅約0.15mの溝が部分的に巡る。ピットは6本。そのうち主柱穴と思

われるのがP 1・P 2・P 4・P 6の4本であった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より平安時代であった。床面は、フラットで軟弱であった。

遺物は、須恵器蓋1点の他ほとんど出土しなかった。

第26図 第9号住居跡

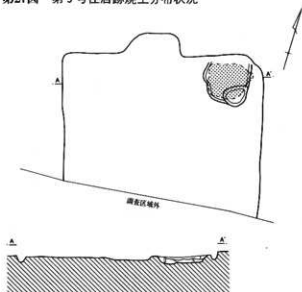


SJ9 A-A'

1. 暗褐色土
[粘土小ブロック(中)、カーボン粒子(中)、白色細粒子(少)]
2. 黄褐色土
[粘土小ブロック(中)、カーボン粒子(中)、白色細粒子(中)]
3. 暗褐色土
[ロームはしりありあるが砂質]
4. 暗褐色土
[ロームブロック(中)] 粘質土

0 L=2.00 2m

第27図 第9号住居跡焼土分布状況

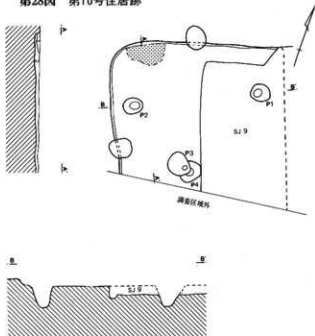


SJ9 A-A'

1. [粘土ブロック(中)、粘土粒子(中)、カーボン粒子(中)] 粘質土
2. [暗褐色土
[ローム粒子(多)、カーボン粒子(少)] 砂質土
3. 暗褐色土
[ロームブロック(少)] 砂質土

0 L=2.00 2m

第28図 第10号住居跡



SJ10 A-A'

1. 暗褐色土
[粘土ブロック(多)、カーボン粒子(少)]
2. 暗褐色土
[ローム粒子(中)]

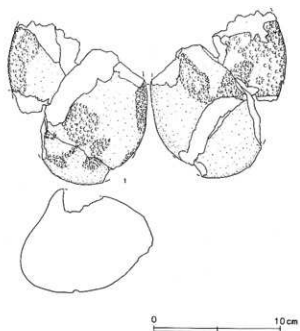
0 L=2.00 2m

第9号住居跡(SJ-9)第26図、第27図

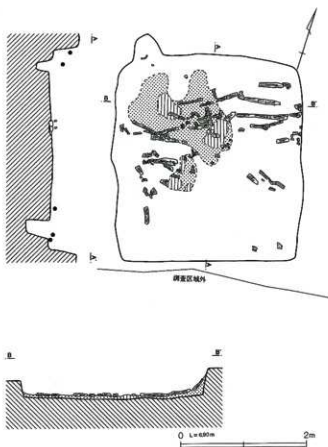
C-12グリッドで見つかった。方形をしていた。SJ11を切っていた。長径×短径×深さは2.7×3.02×0.55mであった。主軸方向はN-12°-Wであった。カマド1基が見つかった。壁溝は幅約0.15mの溝がほぼ全周する。ビットは4本。そのうち主柱穴と思われるのがP1・P3の2本であった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より平安時代であった。床面のすぐ上まで削平されていた。

遺物は、ほとんど出土しなかった。

第29図 第II号住居跡炉出土台石



第30図 第II号住居跡遺物出土状況



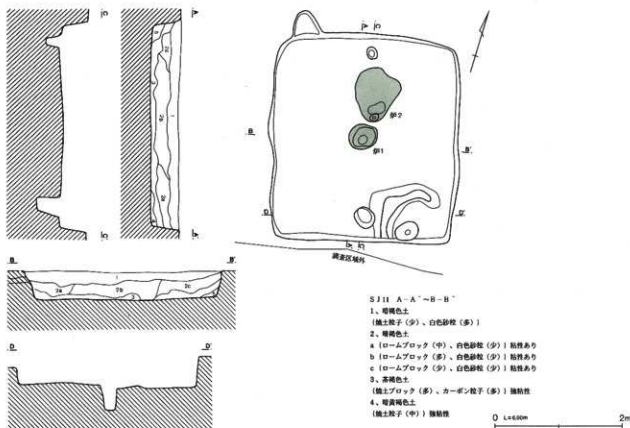
第31図 第II号住居跡出土遺物



第8表 第II号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	埴	(9.4)	3.3		S+D+W'+B+S'	普通	淡褐色	20%	内外面とも摩滅 表面の剥落著しい
2	台付甕		5.8		S+W+W'+B'+R	普通	橙褐色	30%	
3	壺		4.2	(6.2)	R+W+S	不良	淡暗褐色	20%	
4	埴		1.5	3.2	S+R+W'+W	普通	淡褐色	90%	

第32図 第11号住居跡



第10号住居跡(S J-10)第28図

C-12グリッドで見つかった。S J9に切られていた。方形をしていた。長径×短径×深さは2.35×2.8×0.1mであった。主軸方向はN-19°-Wであった。ピットは4本。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。かなり削平されていた。1層は焼土ブロックを含む。北西コーナー部で焼土ブロックが浮いた状態で見つかった。床面は、軟弱であった。

遺物は、ほとんど出土しなかった。

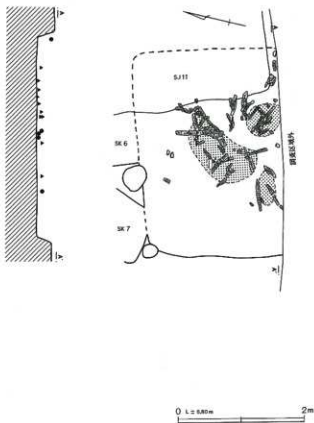
第11号住居跡(S J-11)第29図～第32図

C-11・C-12グリッドで見つかった。S J12を切っていた。方形をしていた。長径×短径×深さは3.35×3.05×0.4mであった。主軸方向はN-15°-Wであった。中央に炉が2基見つかった。ピットは3本そのうち主柱穴と思われるのが2本であった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

3層以上は自然堆積。火災住居跡で、床面から僅かに浮いた状態で、炭化した木材・焼土が見つかった。炭化材と床面の間には、焼土を混じった土層がみられた。炭化材は長軸に直交するものが多かった。炉2からは、台石が見つかった。

遺物は、五須式に属する土器がわずかに出土した。

第33図 第12号住居跡遺物出土状況



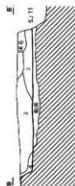
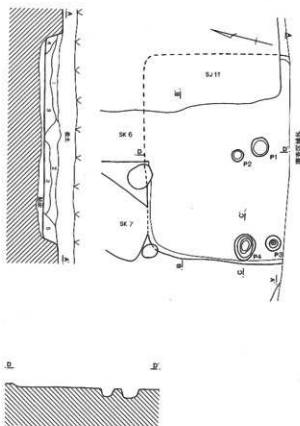
第12号住居跡(SJ-12) 第33図、第34図

C-11グリッドで見つかった。S.J.11・SK 6・SK 7に切られていた。方形をしていた。長径×短径×深さは2.35×3.35×0.35mであった。主軸方向はN-14°-Wであった。ピットは4本。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

自然堆積。南側半分以上は、調査区外であった。火災住居跡であった。炭化材は床面及び僅かに浮いた状態で出土した。炭化材の付近には、焼土があった。床面は貼床であり、中央部が特に堅かった。柱穴は不規則であった。P 4の土層からは、柱痕が見つかった。

遺物は、ほとんど出土しなかった。

第34図 第12号住居跡



S.J. 12 A-A' ~ B-B'

- 1、暗褐色土
- a (白色粒子 (多)、暗黄褐色砂質土ブロック (中))
- b (カーボン粒子 (中)、白色粒子 (多)、暗黄褐色砂質土ブロック (中))
- 2、暗赤褐色土
- (カーボン粒子 (少)、白色粒子 (少)、焼土大粒子 (多)、砂質土ブロック (多))
- 3、暗赤褐色土
- (焼土粒子 (中)、カーボン粒子 (中)、暗黄褐色砂質土ブロック (少)) 炭化材 (含む)・粒状あり
- 4、暗褐色土
- (ロームブロック (多)、白色粒子 (多))
- 5、暗褐色土
- (焼土ブロック (多)、白色粒子 (中)) 焼粒性

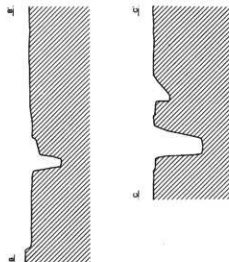
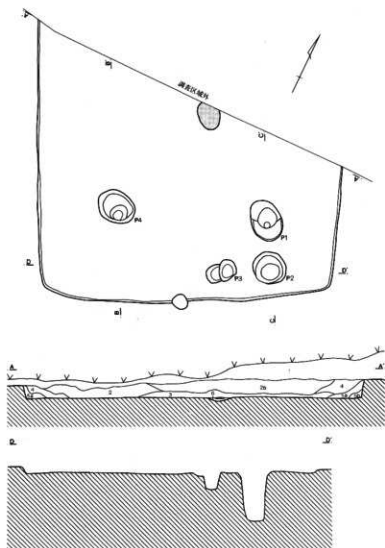


C-C'

- 1、暗褐色土
- (暗黄褐色土ブロック (中)) 砂質土
- 2、暗赤褐色土
- 焼土を挟いた柱の痕
- 3、暗褐色土
- 柱痕



第35図 第13号住居跡



- S J 13 A-A
1、灰褐色土
耕作土
2、暗茶褐色土
a [ロームブロック(稀少)、機土ブロック(少)、カーボンブロック(少)]
b [ロームブロック(稀少)、ローム砂子(少)]
3、暗茶褐色土
[ローム砂子(中)]
4、暗茶褐色土
[機土細砂子(少)、カーボン細砂子(少)]
5、暗茶褐色土
a [ローム砂子(少)]
b [ローム砂子(中)]
6、暗茶褐色土
伊勢り方調整土

0 L=5.00m 2m

第36図 第13号住居跡出土遺物



第9表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形鉢	(10.1)	4.6		W+R+W'+S	普通	淡褐色	20%	

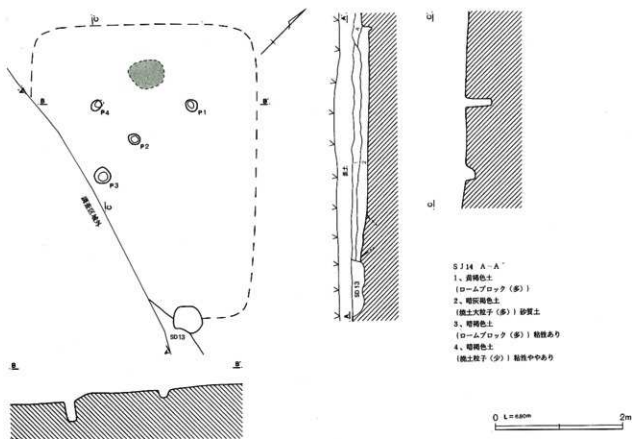
第13号住居跡(S J-13)第35図、第36図

B-11・B-12・C-11・C-12グリッドで見つかった。方形をしていた。長径×短径×深さは4.95×3.1×0.3mであった。主軸方向はN-25°-Wであった。地床が1基が見つかった。ピットは4本。そのうち主柱穴と思われるのがP1・P4の2本であった。時期は、遺構配置・覆

土・出土遺物等より古墳時代前期であった。自然堆積。北半分が調査区外であった。遺構確認の段階ではほぼ床面まででしてしまっていた。床面の残っていた。部分は、堅くしまっていた。

遺物は、小形の鉢だけであった。

第37図 第14号住居跡



第14号住居跡(S J-14)第37図

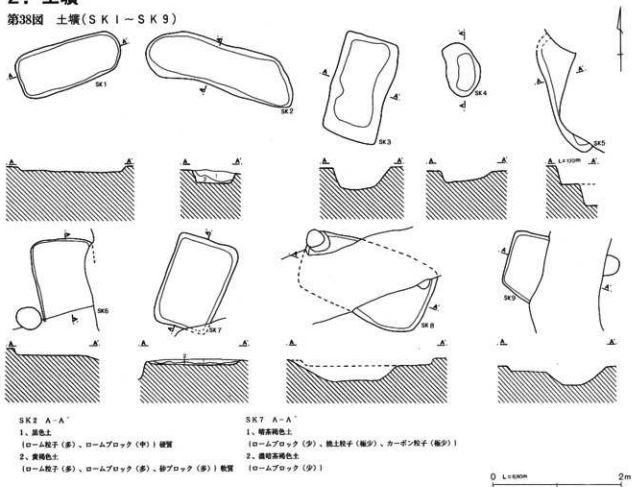
C-10グリッドで見つかった。SD13に切られていた。長方形をしていたと思われる。長径×短径×深さは4.5×2.9×0.25mであった。主軸方向はN-48°-Wであった。地床炉1基が見つかった。ピットは4本。時期は、遺

構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

自然堆積。確認段階で床面下で露呈してしまった。ピット・炉ともに床面下の残照であった。破線は推定である。調査区壁断面の観察では、幅の狭い壁溝があった。遺物は出土しなかった。

2. 土坑

第38図 土坑(SK1~SK9)



第1号土坑(SK-1)第38図

B-4グリッドで見つかった。楕円形をしていた。長径×短径×深さは1.7×0.7×0.1mであった。主軸方向はN-74°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第2号土坑(SK-2)第38図

B-2グリッドで見つかった。SD2を切っていた。楕円形をしていた。長径×短径×深さは2.4×0.75×0.2mであった。主軸方向はN-75°-Wであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第3号土坑(SK-3)第38図

B-3グリッドで見つかった。長方形をしていた。長径×短径×深さは1.65×0.9×0.35mであった。主軸方向はN-13°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第4号土坑(SK-4)第38図

B-2グリッドで見つかった。SJ3を切っていた。楕円形をしていた。長径×短径×深さは0.85×0.55×0.15mであった。主軸方向はN-20°-Wであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第5号土坑(SK-5)第38図

B-3グリッドで見つかった。SJ2を切っていた。楕円形をしていたと思われる。長径×短径×深さは(1.95)×0.6×0.65mであった。主軸方向はN-21°-Wであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第6号土壇(S K-6)第38図

C-11グリッドで見つかった。長方形をしていたと思われる。長径×短径×深さは(1.15)×0.85×0.1mであった。主軸方向はN-10°-Wであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第7号土壇(S K-7)第38図

C-11グリッドで見つかった。長方形をしていた。長径×短径×深さは1.45×1.0×0.1mであった。主軸方向はN-20°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第8号土壇(S K-8)第38図

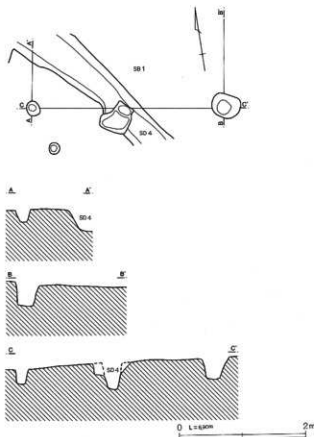
C-11グリッドで見つかった。SD 6に切られていた。長方形をしていたと思われる。長径×短径×深さは(2.15)×1.25×0.35mであった。主軸方向はN-70°-Wであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第9号土壇(S K-9)第38図

B-11・C-10・C-11グリッドで見つかった。SD 6に切られていた。長径×短径×深さは(1.05)×0.6×0.25mであった。主軸方向はN-16°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

3. 掘立柱建物跡

第39図 第1号掘立柱建築跡



第1号掘立柱建物跡(S B-1)第39図

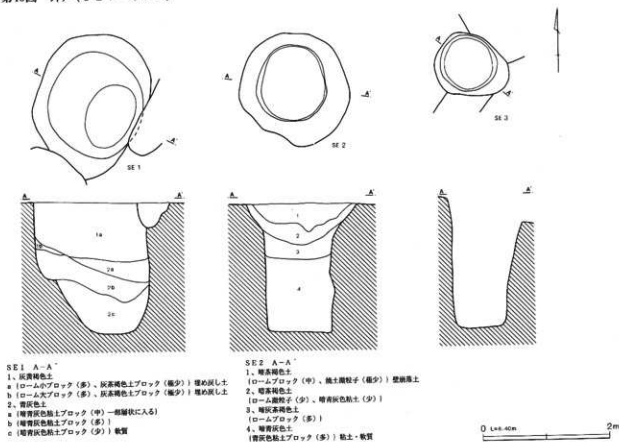
A-2・A-3・B-2・B-3グリッドで見つかった。SD 4に切られていた。南側の2間分だけ見つかり、北側の大部分は攪乱で消失していた。短径は3.1m、柱穴の深さは0.35mであった。主軸方向はN-9°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であった。

4. 井戸

第1号井戸(S E-1)第40図

C-9グリッドで見つかった。SD 12、SE 3に切られていた。楕円形をしていた。長径×短径×深さは2.08×1.7×2.05mであった。主軸方向はN-27°-Wであった。埋土1層は埋め戻されていた。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第40図 井戸(SE1~SE3)



第41図 第2号井戸出土遺物



第10表 第2号井戸出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	3.5	(9.8)		S+W'+R+B+ (大)	良好	暗赤褐色	10%	外面は自然釉がかかる
2	甕				S+W+B+W'	良好	濃灰色		擬口縁 底部のすぐ上段部分

第2号井戸(SE-2)第40図、第41図

B-9・C-9グリッドで見つかった。ほぼ円形をしていた。長径×短径×深さは1.8×1.7×2mであった。主軸方向はN-37°-Eであった。埋土は自然堆積であった。

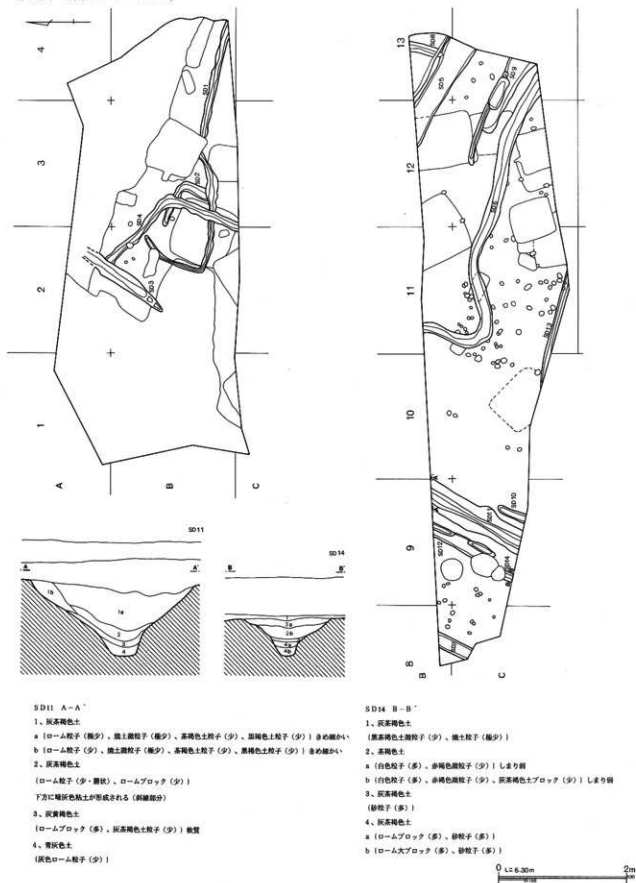
時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。須恵質の高台と胴部破片が出土した。

第3号井戸(SE-3)第40図

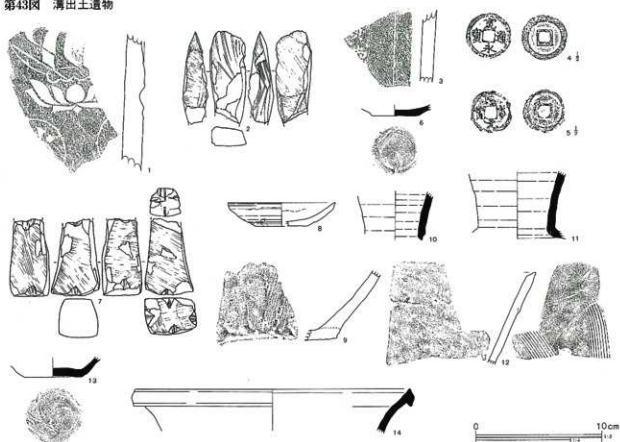
C-9グリッドで見つかった。楕円形をしていた。長径×短径×深さは1.2×1.0×2.05mであった。主軸方向はN-74°-Eであった。時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

5. 溝

第42図 溝(SD1~SD14)



第43図 溝出土遺物



第11表 溝出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1・3	板石塔婆								
6			1.2	5.0	S+W+W'+B	普通	淡黄褐色	100%	
8	灰釉皿	(13.2)	2.5	(5.5)	B+W きめ細かい	良好	灰色	15%	
9	甕		7.0			普通			
10	長頸瓶		5.2		B+W	普通	淡灰褐色	15%	
11	長頸瓶		7.1		B+W	普通	淡灰褐色	25%	自然釉かかる 釉かかる所は緑灰色
12	すり鉢							10%	在地産
13	坏		2.1	6.0	W+W'+S	良好	赤褐色	95%	
14	甕	(29.0)	4.4		W+W'+S	良好	淡灰色	5%	外側表面黒色に自然釉かかる

第1号溝(S D-1)第42図、第43図 1~5

B-3・B-4グリッドで見つかった。S J 2・S J 3・S J 6を切って、SK 2・SD 4に切られていた。全長×幅×深さは(2.00)×0.38×0.34mであった。浅い箱形に掘られていた。直線的に延びて、西側で「コ」字状に曲がっていた。およそN-75°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。板石塔婆、砥石、古銭、陶磁器が出土した。第42図1は、かなり彫りが深い。2は使い込まれて、楔形になっている。古銭は、「寛永通宝」、「熙寧通宝」であった。

第2号溝(S D-2)第42図

B-2・B-3グリッドで見つかった。SD 2、SD 4に切られていた。全長×幅×深さは(3.7)×0.55×0.21mであった。浅い「U」字状に掘られていた。「く」字状に曲がっていた。およそN-35°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第3号溝(S D-3)第42図

A-2・B-2グリッドで見つかった。SD 4に切られていた。両端ともに攪乱で消失していた。全長×幅×深さは(7.7)×1.66×0.64mであった。「V」字状に掘り込まれていた。直線方向に延びて、およそN-35°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より古墳時代前期であったと思われる。

第4号溝(S D-4)第42図

A-2・B-2・B-3・C-2・C-3グリッドで見つかった。S J 6・SD 1・SD 2を切っていた。全長×幅×深さは(1.52)×0.65×0.25mであった。「V」字状に掘り込まれていた。「く」字状に曲がっていた。およそN-20°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第5号溝(S D-5)第42図、第43図 6

B-12・B-13・C-13グリッドで見つかった。SD 8に切られていた。SD 9に並行していた。全長×幅×深さは(6.74)×2.28×0.55mであった。浅く幅広く掘られていて、北側に細い溝が併設していた。直線方向に延びて、およそN-60°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

遺物は、陶器底部が出土した。

第6号溝(S D-6)第42図

B-11・C-11・C-12・C-13グリッドで見つかった。S J 8、S J 9を切っていた。SD 5、SD 9に並行していた。全長×幅×深さは(20.39)×1.35×0.39mであった。「U」字状に掘り込まれていた。西側で「く」字状に曲がっていた。およそN-70°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第7号溝(S D-7)第42図、第43図 7, 8, 9

B-8・C-8グリッドで見つかった。両端ともに調査区外に延びていた。全長×幅×深さは(2.8)×1.30×0.49mであった。浅い「U」字状に掘り込まれていた。直線的に延びて、およそN-35°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。砥石、陶器、陶器甕底部が出土した。7は全面が使用されていて中央部がすり減っていた。上下には、「十字」の切り込みが入っていた。8は灰袖がかかっていた。

第8号溝(S D-8)第42図

B-13グリッドで見つかった。SD5に切られていた。全長×幅×深さは(2.1)×0.7×0.3mであった。浅い「U」字状をしていた。直線的に延びて、およそN-15°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第9号溝(S D-9)第42図、第43図 10、11

C-12・C-13グリッドで見つかった。SJ7、SJ8を切っている。SD5・SD6にほぼ並行する。全長×幅×深さは(8.6)×1.3×0.45mであった。浅く掘り込まれていて、北側に細い溝を内包していた。直線的に延びて、およそN-70°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。陶器が出土した。

第10号溝(S D-10)第42図

C-9グリッドで見つかった。SD11・SD12に並行していた。全長×幅×深さは(2.2)×0.55×0.15mであった。浅い「U」字状に掘られていた。直線的に延びて、およそN-30°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第11号溝(S D-11)第42図

B-9・B-10・C-9グリッドで見つかった。SD10・SD12に並行していた。全長×幅×深さは(7.5)×1.75×1.05mであった。「V」字状に掘り込まれ、底部付近で箱形になっていた。直線的に延びて、およそN-30°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第12号溝(S D-12)第42図

B-9・C-9グリッドで見つかった。SD10・SD11に並行していた。SE1を切っていた。全長×幅×深さは(5.0)×1.0×0.5mであった。東側に細い溝を内包していた。箱形に掘り込まれていた。直線的に延びて、およそN-25°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

第13号溝(S D-13)第42図、第43図 12、13

C-10・C11グリッドで見つかった。全長×幅×深さは(9.00)×0.55×0.35mであった。浅い「U」字状に掘り込まれていた。直線方向に延びて、およそN-75°-W方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。摺り鉢、陶器が出土した。

第14号溝(S D-14)第42図、第43図 14

C-9グリッドで見つかった。SD12に連続していた。全長×幅×深さは(0.8)×0.6×0.4mであった。「V」字状に掘り込まれ、底部付近で箱形に掘り込まれていた。直線的に延びて、およそN-30°-E方向であった。

時期は、遺構配置・覆土・出土遺物等より中世以降であったと思われる。

遺物は、陶器甕の口縁部が出土した。

6. グリッド出土遺物

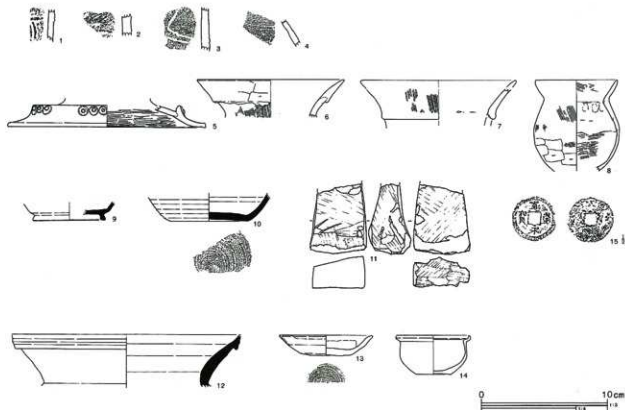
縄紋式土器(第44図1~3) 3片だけ出土した。1は諸磯C式から十三苦提式。2は加曾利EⅣ式。3は堀之内2式であった。

古墳時代前期の土器(第44図4~8) 4は振幅の小さい櫛描き波紋。5は器台脚部でいずれも外来系土器で

ある。6、7は複合口縁壺。8は小形土器でけずりが入る。後張第177号住居跡の時期である。

その他の遺物(第44図9~15) 9、10は平安時代の須恵器。11は砥石。12~14は陶磁器である。

第44図 グリッド出土遺物



第12表 グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1		(8.6)	2.3				暗褐色		縄文
2			3.2	(21.0)			淡暗褐色		縄文
3		(24.0)	9.7				暗褐色		縄文
4		(9.9)	1.7		S+W+W'+B+B'+R	普通			櫛描文破片
5	高坏	(7.6)	3.0		W+W'+G+B+S	普通	明褐色	20%	砂っぽくザラつく 二次被熱
7	壺		5.5	(7.6)	S+W+W'+B'	普通	外黒色	5%	類似した土で底部あり
8	小型甕		2.2	(8.0)	W+R+S	普通	明褐色	20%	二次被熱の可能性
9	高台坏		4.1		W+W'	普通	灰色	20%	瀬戸
10	坏			(3.8)	S+W+W'	普通		20%	
12	甕			(3.8)	W+B+R+W'	普通	灰褐色	5%	
13	灰軸皿				R+W+W'+B'+B	普通	灰白色	40%	瀬戸 緑灰色の軸
14	小鉢				W+B+S	普通	明橙褐色		全体に釉かける(底部)

V 結 語

上内手遺跡では、中・近前期を除いて古墳時代前期と平安時代の土器が出土した。特に古墳時代前期は住居跡が10軒、掘立柱建物跡が1棟、溝が1条であった。遺跡のはんの一部を掘断したにすぎないし、出土遺物も少なかったが、この遺跡は、どんな時間と意味をもっていたのだろうか。近年開催された日本考古学協会のシンポジウムと大宮台地の位置づけを行った書上氏の論考を基準として考えたい。

1. 上内手遺跡の集落と住居跡

集落内にある住居跡は、その向きと切り合い関係から、2時期に分けられる。主軸というより、北に向けた辺の角度を見ると、北から東に振れるグループと西側

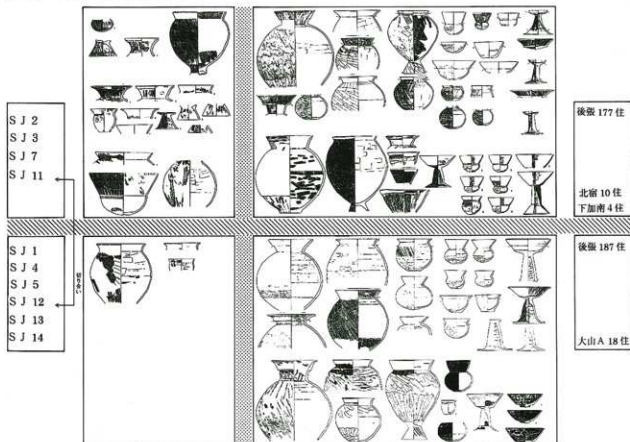
に振れるグループがある。土器の様相では、前者が古く、後者が新しく矛盾はない。ただし例外は、S J-1で土器は新しい。

以上から、古いグループ(S J-2・S J-3・S J-7・S J-11)、新しいグループ(S J-1・S J-4・S J-5・S J-12・S J-13・S J-14)に分離される。

2. 上内手遺跡の編年の位置

まず、上限は下道浜遺跡ST4にまで届かない。いわゆる、五領式土器の新しい部分である。書上氏の段階設定では、第3段階に当たるものと考ええる。これが、第一の基準である。

第45図 上内手遺跡古墳時代前期土器群の復元



第2は、諏訪遺跡32住・後張遺跡95住・152住までは下らないものと考えた。第3は、集落の連続性から古いグループと新しいグループが開かないと想定する。

以上の点から、第3段階の2細分案に、合致する。この関係を書上氏の段階設定の表と関連させたのが第45図である。ただし、後張177住と後張187住は筆者が加えた。上内手遺跡では、明確な出土はなかったが柱状脚部を持つ布留式彩高杯が出現していた時期以降であることにはまちがいないものと思われる。特に、新しい段階は和泉式と接続的で微妙である。

3.最後に、富士見市周辺の遺跡との関連を求めてみたい。台地上にある遺跡と低地の自然堤防上の遺跡の比較でもある。

富士見市南通遺跡を代表としてあげる。300軒近くある住居跡の中で、上内手遺跡に関係すると思われる住居跡は31号住居跡・48号住居跡などが上げられる。しかし、古墳時代前期3期と判断できる住居跡資料はきわめて少ない。弥生時代以降延々続く在地の土器が圧倒的多数を占めているのがわかる。明らかに、布留式土器など外来系土器（もしくは、その影響を受ける土器）が主たる構成になっている県北部地域とは異なっている。

その中で、比較的かつちりした土器を出土する上内手遺跡は、台地上の遺跡とは違っている。今後、荒川沿いにある自然堤防上の遺跡が開いてくれば、新たな展開があるかも知れない。

挿図引用文献

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 今泉 泰之他 | 1979 「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 |
| 埼玉 県 | 1982 「新編 埼玉県史 資料編2 原始・古代・古墳」 |
| 立石 盛詞 | 1982 「後張」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集 |
| 小倉 均他 | 1983 「北宿遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告 第26集 |
| 笹森紀己子 | 1986 「吉野原遺跡・下加南遺跡」 大宮市遺跡調査会報告 別冊3 |
| 埼玉 県 | 1987 「新編 埼玉県史 通史編1 原始・古代」 |

参考文献

- | | |
|-------------------|---|
| 小久保 徹・柿沼 幹夫 | 1979 「下田・諏訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集 |
| 小出 輝雄 | 1983 「針ヶ谷遺跡群―南通遺跡第3地点の調査―」 富士見市遺跡調査会報告 第21集 |
| 佐々木保俊・小出輝雄 | 1984 「針ヶ谷遺跡群」 富士見市遺跡調査会報告 第23集 |
| 北武蔵古代文化研究会他編 | 1984 「第5回 三県シンポジウム古墳出現期の地域性」 |
| 寺沢 薫 | 1986 「矢部遺跡」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊 |
| 田島 明人 | 1986 「漆町遺跡1 考察」 石川県埋蔵文化財センター |
| 日本考古学協会編 | 1988 「シンポジウム 関東地方における古墳出現期の諸問題」 |
| 坂野 和信 | 1988 「和泉式後期土器の様相」 本庄市立歴史民俗資料館紀要 第2号 |
| 日本考古学協会新潟大会実行委員会編 | 1993 「シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討」 |
| 書上 元博 | 1994 「稲荷台遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第139集 |

写真図版



上内手遺跡遠景



上内手遺跡 A 区全景 (北から)



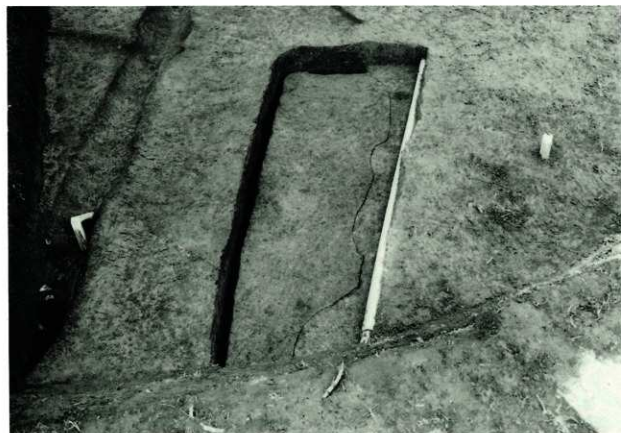
上内手遺跡B区全景(北から)



上内手遺跡B区近景 第3図



上内手遺跡A区近景 第3図



第1号住居跡 第4図



第2号住居跡遺物出土状況 第5図



第2号住居跡 第7図



第3号住居跡遺物出土状況 第9図



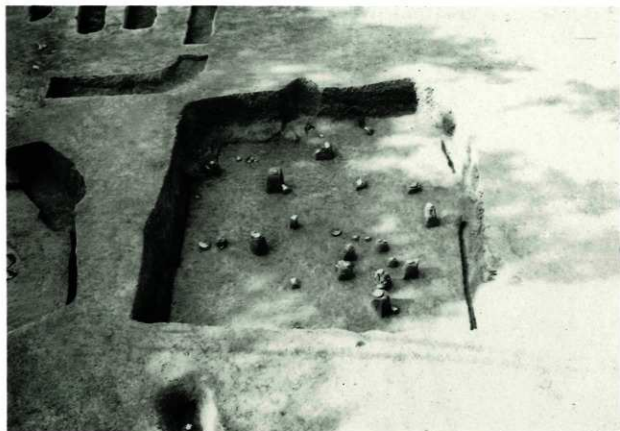
第3号住居跡 第11図



第4号住居跡 第13図



第5号住居跡 第15図



第6号住居跡遺物出土状況 第16図



第6号住居跡 第18図



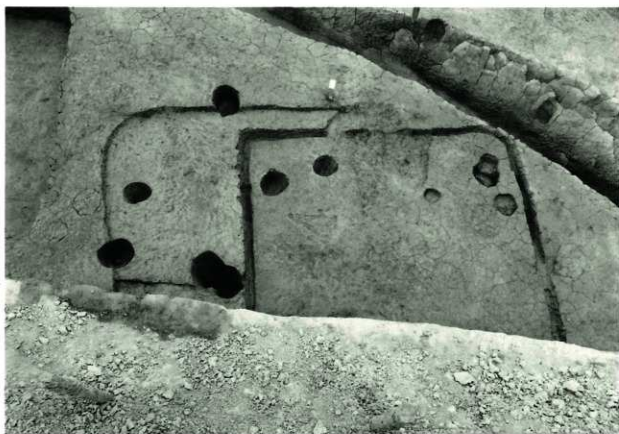
第7号住居跡 第23図



第8号住居跡 第24図



第9号住居跡 第26図



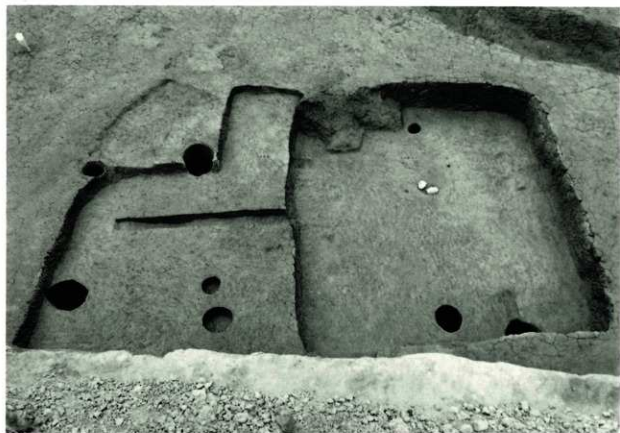
第9・10号住居跡 第26図・第28図



第11号住居跡遺物出土状況 第30図



第12号住居跡遺物出土状況 第33図



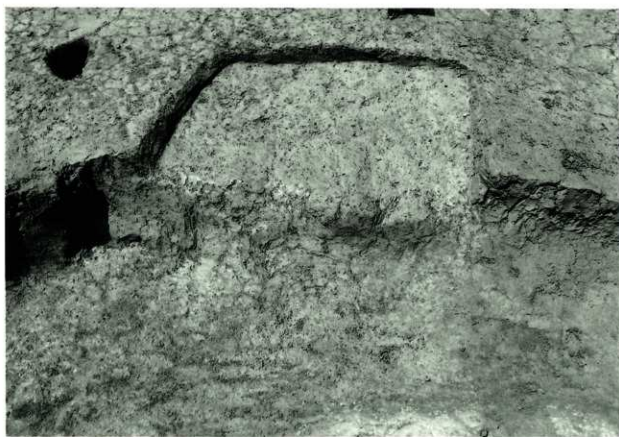
第11・12号住居跡 第32図・第34図



第13号住居跡 第35図



第7号土模 第38图



第9号土模 第38图



第1・3号井戸 第40図



第2号井戸 第40図



第1号溝 第42図



第6号溝 第42図



第11号溝 第42図



第13号溝 第42図



第2号住居跡 第8図1



第2号住居跡 第8図2



第3号住居跡 第10図5



第3号住居跡 第10図1



第3号住居跡 第10図6



第3号住居跡 第10図2



第7号住居跡 第22図2



第7号住居跡 第22図4



第7号住居跡 第22図5



グリッド 第44図5



第6号住居跡 第17図6



第6号住居跡 第17図9



第6号住居跡 第17図12



第6号住居跡 第17図14



第6号住居跡 第17図16



第6号住居跡 第17図18



第6号住居跡 第17図20



第6号住居跡 第17図22



第6号住居跡 第17図25



第6号住居跡 第17図34



第1号溝 第43図1

報告書抄録

ふりがな	かみうちて いせき							
書名	上内手遺跡							
副書名	県道東大久保大井線関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
著者氏名	橋本 勉							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 1995(平成7)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村		北緯 遺跡番号	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみうちて いせき 上内手遺跡	さいたまけん ふじみし 埼玉県富士見市 ひがしふじみ(旧) 東大久保121-2 他	11235	109	35°59'19"	138°38'00"	19930106～ 19930430	1,100	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
上内手遺跡	集落跡	古墳時代前期 平安時代 中世以降		竪穴住居跡 11軒 溝 1条 掘立柱建物跡 1軒 竪穴住居跡 3軒 土壇 9基 井戸 3基 溝 14条		土師器(壺、甕、高盆、 埴など) 土師器(甕など) 須恵器(甕、坏、坏蓋 など) 古銭 砥石 板石塔婆		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第160集

富士見市

上内手遺跡

県道東大久保大井線関係埋蔵文化財調査報告

平成7年3月16日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 0493 (39) 3955

印刷／関印刷株式会社